

道と物

——「不易流行」に関する試論——

村松彩石

「道は之を行きて成り、物は之を謂いて然り。」

（『莊子』 齊物論篇）

旅の詩人芭蕉晩年の文業

「片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひや

まず」と『おくのほそ道』に記した、芭蕉は別に船頭でも、馬子でもなかったが、その一日一日が旅であり、旅を栖としたという点で、真に旅の詩人というにふさわしい人であったと言えよう。このように旅と切り離して考えることのできない、芭蕉の晩年の文業の最たるものに、『おくのほそ道』と「不易流行」説がある。

旅人と呼ばれることを無上の誇りとした、芭蕉の遺産とも言うべき、この紀行文と俳論は、共に旅の不可欠の要素である、

道に関わるものであった。一方が往来する現実の道であり、他方が条理としての仮空の道であろうとも、道であることに変わりはないはずである。

往来の道の記である『おくのほそ道』

は、その遺言によって去来に托され、芭蕉没後八年を経た元禄十五年に、井筒屋本として、京都の井筒屋庄兵衛により刊行された。また重層的に条理の道を説く「不易流行」説の方は門弟の向井去来による『去来抄』、同じく服部土芳による『三冊子』を介して、間接的に伝えられた。

『笈の小文』、『柴門辞』、『おくのほそ道』において、造化論を背景とする風雅論を強力に展開したとはいえ、芭蕉が、作

品、書簡、口答によるほかは、纏まった俳論らしい俳論を残さなかったことが、門弟による間接的伝承の理由とされている。芭蕉が俳論の書を残さなかった理由について、『三冊子』は次のように伝えている。

一、法式設定による作風の固着化への危惧
二、蕉門の中での志向の相違に対する容認
三、短文と実作による間接的な伝達の自信
四、門弟個々への対機説法の効果への信頼
また同書は、芭蕉が、彼の言説を書きとめようとする、熱心な門弟たちの行為に対して、これを許可したばかりでなく、推奨した旨を伝えている。

このような経緯で残された「不易流行」説は種々の理由で、『おくのほそ道』の刊

行に比べ、大幅に遅れて刊行されることになる。

『去来抄』は、去来没後七十年を経た安永四年、京都井筒屋より刊行、『三冊子』は、土芳没後四十二年を経て安永五年に、関更翻刻本として刊行された。両書が刊行されるまでに、芭蕉没後、実に八十一年から二年の歳月を要したことになる。

この「不易流行」説と、散文表現による、この説の実証とも思われる『おくのほそ道』の二つが、現在もお古典として、多くの読者に支えられて、不死鳥のように蘇り続けていることは周知の事実である。

「不易流行」説構想の時期

ここで小論が対象とするのはこの「不易流行」説である。まず一体いつごろからの構想が芭蕉の脳裡に宿ったか、というところから始めるのが順序であろうが、この決定はそれほど容易ではない。正確な時期については、わかりかねると言うべきだろう。

もちろん『去来抄』によれば、この説は、元禄二年（この年に、芭蕉は『おくの

ほそ道』の旅に出立する）の冬、初めて説かれたことになっている。去来がそう主張する根拠は元禄二年十二月、芭蕉からの来信に、「只今天地俳諧にして万代不易に候」という表現があり、これは明らかに「不易流行」説の過渡的な形と認められるからである。

だが芭蕉は、この旅の途中で、羽黒山手向村の図司呂丸に、「天地流行のはいかい」、「天地固有のはいかい」（『聞書七日草』）という形で、「不易流行」説の原型と思われる構想を漏らしている。この時期は恐らく元禄二年六月三日から九日までの間であつたろうと推定される。

それはともかく、去来説は、この新説の出現を一応示しているが、では「不易流行」説の構想がいつごろ芽生えたのか、という点については全く触れていないのである。ところがここに、この説の発祥を暗示する面白い事実がある。それは、其角の著書『枯尾筆』の中の「芭蕉翁終焉記」に載っている。先師芭蕉の生涯を回想した一文である。

天和二年師走も数え日となったころ、駒込大円寺を火元とする大火（いわゆる八百

屋お七の火事）が発生し、このため江戸市の中の大半は焼尽し、深川にあった芭蕉の草庵までが類焼するという出来事が起こった。その時、芭蕉は少しも慌てず、頭から濡れ苦を引つかぶって、大川に飛びこみ、煙には捲かれたが運よく難を逃がれることができたという。

この大火の翌年天和三年五月、芭蕉は、避難先甲州谷村の門人高山麿峙の許より、日本橋船町の仮住居へ戻った。江戸に戻った翌月の六月二十日には、伊賀から生母が死亡したという悲報が届いた。その年の冬には、門弟たちの努力で再建された、深川の芭蕉庵に移ることができた。芭蕉の生活もやや落着き、庵を訪れる風流人士の数も増える一方であつた。この時植樹された一株の芭蕉（実は大火の一年前李下より贈られた）に因んで、この庵が芭蕉庵と呼ばれ、また先師の名、芭蕉の由来もここから始まった、と其角は記している。丁度そのころの話である。

「その此^{こゝろ}芭蕉寺大願和尚と申が、易にくわしくおはしけるによりてうかがひ侍るに、或時翁が本卦のやうみるとて、年月時日を古曆に合せて筮考せられけるに、萃と

いふ卦にあたる也。是は一もとの薄の風に吹れ雨にしほれて、うき事の数々しげく成ぬれども、命つれなく、からうじて世にあるさまに譬たり。さればあつまるとよみて、その身は潜ならんとすれども、かなたこなたより事つどひて、心ざしやすんずる事なしとかや。信に聖典の瑞を感じける。」〔枯尾華〕

芭蕉は「猶如火宅の変を悟り無所在の心を發し」(同書)とあるから、先ごろの大火の体験は想像以上にすさまじかったことと思われる。その心の傷痕も少しづつ癒えかかつてきたところへ、母の死の知らせ、そのうえ門前市をなす訪問客、加えて食客まであったという。少々ノイローゼ気味になった芭蕉が、知り合いの大嶺和尚に頼んで、彼の運勢をみてもらった、というのが前掲の一文であろう。

後日談になるが、この円覚寺の大嶺和尚についての『三冊子』の記事を見ると、この方は、芭蕉のために筮占した時(天和三年? (一六八三年))から二年あまり後に、亡くなられたとある。このことは、和尚遷化の時の芭蕉の追悼句「梅こひて卯の花拝む涙かな」によって、知ることができ

る。旅先から其角に托して伝えたとされる、この作品は貞享二年(一六八五年)『野ざらし紀行』に収められた。大嶺和尚の高潔な人柄を梅花にたとえ触目の卯の花を配した、心情のよく表現されている作品と言えよう。

この時期に、芭蕉は老莊思想から仏教思想へと転換したと言われている。引用した『枯尾華』の「その此」というのは、あまりはつきりした表現ではないが、この天和二年の大火から一二年後と見て間違いないであろう。後で触れるが、これは、去來說(「不易流行」説の出現)よりも、四一五年以上も前に当たる。あくまで推定になるが「不易流行」説の構想が宿つたのは、あるいはこの時期に始まるのではなかろうか。

ここでまず、引用文に出てくる、易の用語を簡単に説明しておく必要がある。筮考とは、易の用具である五十本の筮竹を用いて吉凶を占うことを言うのである。芭蕉の生まれた年・月・日・時刻をもとに占ったと記述してある。本卦とは、簡単に言えば、筮竹を用いた、易独自の計算法に基

くその結果であり、(四宮Ⅱ一変、三変Ⅱ一爻、六爻Ⅱ一卦)、それによって得られた卦である。

こうして最後に得られた、卦の「萃」について、其角は、芭蕉の現状にあまりにもびつたりなので、感嘆のあまり「信に聖典の瑞」つまり「易経」の靈驗あらたかことに感心した、と書いている。萃の象について、其角が記しているのを見ると、この卦に当たるものは、内憂外患のため余命いくばくもなく、やつと生きながらえているような状態である。

そこへもつてきて、さらに四方八方からあれこれと心配ことが起こり、ほんの一時といえども氣持の休まる時がないのである。大火からの奇蹟的脱出、生母死去の報知、心なき来客に対する応待、突然の寄食者による心労等の一切が、この卦の象によって、言い当てられたと思うのも無理もないことだろう。

だが萃の卦は、其角が細々と記しているほど悪い卦なのだろうか。萃(䷬)は沢地(澤の略で、聚まるという意味である。それは、沢の水が地上に聚まって、物を潤す卦象と考えられている。また民心の和悦順服

の象として王者たるものは、祖先の宗廟において、祭祀を執り行うのによく、民たるものは、有徳の大人に出会うことを希うのによい、とされている。そのうえ、この卦は、進んで大事を行うのにも、よい卦なのである。

ところがこの萃の卦にも、聚まるという意味に含まれている、思わざる異変、聚まるものの適否と、その遅速、さらには立志の不能など、というあまり芳しくない要素がない訳ではない。だがどのような場合にも、貞正を取り守るように、と戒められている。これは誠意をもつて事に当たれば、たとえ思うように行かない時でも、そのために咎を受けるようなことはないのだ、という意味である。

易では、一つの本卦の中には、他の六十三卦のすべてが表わされている、と言われている。これが、占筮による正確な判断を、容易でないものに行っていることは事実である。大巖和尚の占筮の結果が、誤りであるとかないとか、軽々に断ずることができないのは言うまでもあるまい。むしろ卦の良い面より、悪い面を見ることで、現実を直視し、対応策として誠意を強調するこ

とに、彼の教師としての正当さを、認めるのが穩当である。

萃についての説明はこの程度にして、なぜこの占筮の時期が重要であるのか、考えてみよう。先に、芭蕉が大火の体験を契機として老荘思想から仏教思想へ転向した、と言われていると書いた。しかしいくら衝撃的体験によるにしても、これでは話が少し飛躍し過ぎはしないだろうか。

恐らく事實はそうではなく、芭蕉がこの時期に、『庸齋口義』により宋学に傾倒し、また宋学を本とする宋易（義理を主とする易）の思想に親炙した、ということではないだろうか。『易经』は、詩経、書経、礼経、春秋と共に、五経のひとつに数えられている。宋学が剛健正大を尚び、老荘思想の虚静無為を易においても排し、静より動を重視するようになったのは当然の成り行きであろう。

芭蕉の方向転換と言われているものが、このような時代的思潮の解説格子を当てることによって、その実体がさらに明瞭になってくるように思われるがどうであろう。『枯尾華』に載った、この占筮の結果についての、其角の詳細で、またかなり熱っ

ぽい記述から、恐らく円覚寺へは、其角も同道したか、あるいは芭蕉がこのことを、門弟たちの前で、たびたび物語したかどちらかであろう。こうして師弟ともに、この「聖典の瑞」に感じいった時期から、また凝り性の芭蕉が『庸齋口義』や、『易经』（周易繫辭上・下伝、周易説卦、同序卦、同雜卦各伝を含む）を読みかえた時から、芭蕉の心奥に、連句の流れを正すべく、『不易流行』説が胚胎したと考えることは果たして誤りだろうか。

固よりこの説がいくたびかの脱皮を重ねて『去来抄』、『三冊子』に紹介されたように、ある程度完成された形になるまでには、確かに去来の言うように『おくのほそ道』の旅での推敲が必要であつたろう。またこの旅の後上方滞在中の門弟たちとの質疑応答も欠くことはできない。

新しく現われたこの「不易流行」説に対しては、これが昔からあったものか、それとも芭蕉の独創によるものか、疑問に思う者も多かったことであろう。これらの疑問に対して去来は「不易流行は万事にわたる也。しかれども俳諧の先達是をいふ人なし。』（『去来抄』）と彼特有の持って回った

表現で答えている。

この答えは「古来からの説か」という質問に対し、それには直接答えず、「何事にも適用できる」と、適用範囲の方へ逸れている。

「先師芭蕉の発明したのか」という問いにも、「芭蕉より先輩の俳人で、この説を唱えた者はいない」と答えている。この答弁をもう少し鮮明にすれば、この説は昔からあるもので、人事はもとよりあらゆる事象に適用され得るものである。だが俳諧の分野においては、芭蕉が初めてこの説を唱えたのだ、ということになる。では俳諧の分野以外では「万事にわたる」と言われる「不易流行」とは一体何なのであろうか。

この解答はしばらく留保しておいて、芭蕉が聖典として、その靈験に感激した『易経』に話を戻すことにする。周の時代に盛んに行われたと言われる、易はもともとと占筮の書であった。ところが宋学興隆後、これを義理をもつて解釈するようになり、易は占筮と義理を兼ねるものとなったと言われている。

では易の原理は何かと言えば、乾坤二卦

に代表される陰陽が、互いに対立しながら、変化循環を続け、その変化の中に生成発展を、循環の中に調和と統一を保ってゆくことである。この易という名称について、『周易正義』は鄭玄の説を引用して、三つの意味が含まれていると言っている。つまり易簡、変易、不易のこの三つである。

易簡というのは、知りやすく、また従いやすく、簡単にして明瞭であるものを用いる。それは簡単さきまるものであるから、かえって天下の理を獲得することができると言われている。第二の変易というのは、宇宙における森羅万象の流転変化を指すものである。最後の不易は、限りなくまた窮まるところのないこの変化現象を貫く、一定にして不変の法則を言うのである。

『去来抄』と『三冊子』の相違

この易の三義と言われる、易簡、変易、不易の中で、乾坤の変によつて生ずる、無限の変化現象である、変易と、これらの現象を統べる不変の鉄則である、不易とが、とりあえずここでは問題になる。もし仮に

この二つのものが、芭蕉の「不易流行」説の母胎だとするなら、この説を詳述した『去来抄』と『三冊子』の両書における、記述の相違は一体何を意味するものであろうか、という疑問が生ずる。

この相違はこれまで、両書の著者と言われる、向井去来、服部土芳の年齢、性格の差に帰せられて来た。それはともかくこの二つの「不易流行」説のどちらが、芭蕉の真意により近いかということが問題である。だが芭蕉の真意はどうしたら確かめられるだろうか。

確かに『去来抄』では、「不易流行」を作品の風体としてしか理解しておらず、これに比べ『三冊子』の記述には、言説として、より論理的徹底さを感じさせるものがある。このような結果から『三冊子』の方が芭蕉の真意に近いものと言われているが、性格論は論外としても、これだけでは何ら根拠となるものも見当たらないように思われる。そこで両書の記述の相違を通して、この問題を追求することは、とりもなおさず芭蕉の真意を探ることになり、また「不易流行」説の母胎を突き止めることにもなる。

「蕉門に千歳不易の句、一時流行の句といふあり。是を二つに分けて教へ給へる、その元は一つなり。」(『去来抄』)

「師の風雅に、万代不易あり、一時の變化あり。このふたつに究り、その本一つなり。」(『三冊子』)

用語の差こそあれ、どちらも不易流行について述べているものであることは明白であらう。千歳不易と言い、万代不易と言ったとしても、芭蕉がその時々には不易に冠した、形容の言葉であることは明らかである。一時流行と、一時の變化も同じものを指してはいる。しかし芭蕉の口から出た時は同じ意味を持つていたはずの言葉が、ここでは全く別のものに変化してしまっているのである。

去来は蕉門の多くの者がそう考えたように不易も流行も、それぞれ句の風体として考えてしまうのである。これでは次の、芭蕉がこれを二つに分けたことの意味は何とかが通れるとしても、なぜその元が一つであるのかという必然性に関しては、一体何を言っているのかわからなくなってしまうことになる。

この失態は、芭蕉が、俳諧の外に、多角

的な視点を持つことができたのに対して、去来が俳諧そのものの内にしか、それを持ち得なかったことに基くものと思われる。そのうえ流行という言葉の意味を、全く取り違え、別のものにしてしまうという、二重の誤りを冒してしまっているのである。さらに去来は、この近視眼的な見解を、師の教えであると信じて疑わず、彼の門弟にも教示する。この態度は彼の死に至るまで変わらなかったようである。

これに比べ『三冊子』の記述が理路整然としていることは、衆目の見るところであらう。『三冊子』では、この引用に続いて「その本一つ」と言っているが、これこそ「風雅の誠」だ、という有名な断言が続く点が異なる。だんだん触れてゆく心算だが、この点が大変重要なことなのである。では、不易についての両書の見解はどうであらうか。

「不易を知らざれば基たちがたく……不易は古によろしく、後に叶ふ句なる故、千歳不易といふ。」(『去来抄』)

「不易を知らざれば、実に知れるにあらず……不易といふは、新古によらず、変化流行にもかかはらず、誠によく立ちたる姿

なり。」(『三冊子』)

「不易の句は俳諧の体にして、いまだ一つのものずきなき句なり。一時のものずきなきゆゑに古今に叶へり。」(『去来抄』)

「代々の歌人の歌を見るに、代々その變化あり。また新古にもわたらず、今見る所昔見しに変わらず、哀なる歌多し。是まづ不易と心得べし。」(『三冊子』)

「去来抄」は不易を知らなければ「基たちがたく」と言っているが、この基は俳諧の根本というほどの意味で、『三冊子』のように誠を指すものではない。その意味では『三冊子』の「実に知れるにあらず」という簡明な表現は恐ろしいものを含んでいる。「不易は不易なれば、一度是を得て二度を改学ぶに不及」(『旅寝論』)と屁理屈を捏ねて、不易を軽んじ、句の風体としてしかそれを理解し得なかった。去来は、本当は何もわかっていなかったと言われても、仕方がないのではなからうか。

このように理解すると、「古によろしく、後に叶ふ」と言ったところで、それは飽くまでも句の風体に過ぎないのであって、一時の好奇心によるものでないから、評価の永遠性を得ている、と言われるもの

は、眞の不易つまり「不易流行」説の不易とは、何の關係もないことになる。

一方『三冊子』の「新古によらず、変化流行にもかかわらず」という言葉は、不易が万象を超越した別次元のものであることを、把握しての発言であると思われる。それに続く「誠によく立ちたる姿」という表現は、単に不易を擬人化して、その立姿が素晴らしいなどということではなく、流行と共に一方の柱である不易が、誠の上に揺るぎなく立脚していることを示しているものである。

次に『三冊子』は、和歌における変化流行という現象を肯定したうえで、過去現在を通じて評価の不变であるものを、不易と言つてよいだろうと述べている。ここには、明らかに位相の混乱が見られる。そのうえ恐らく芭蕉の言説自体が持つていたとみられる苦悶とも言うべきものの反映が顯著である。

万事にわたると言われる「不易流行」も、事俳諧に適用しようとする場合、これを説明するためには、どうしても具体的なもの挙げて例証しなければならなくなる。方便が必要となつてくるのである。と

ころが門弟たちの眼はどうしてもこの例証されたものを見ず本質を逸しがちなのである。

あれほど犀利な分析を展開していた、土方でさえこのような状態なのである。だがどれほど些細に思われようと、現象と法則のこの混同は「不易流行」説を、根底から否定しざるものであることを忘れてはならない。易の三義という三元的なものを、「不易流行」という言葉に釣られ三元的に扱う者にとつての陥穽がここにある。

流行とは何か

「流行を知らざれば風新たならず。」「流行は一時一時の変にして、昨日の風今日宜しからず。今日の風明日に用ひがたき故、一時流行とはいふ。はやる事をいふなり。」「流行の句は己に一つの物ずきありてはやるなり。形容・衣裳・器物に至るまで、時々のはやりあるがごとし。」（『去来抄』）

「千変万化する物は自然の理なり。変化にうつらざれば風あらたまらず。」「是（変化）に押しうつらずといふは、一旦の流行に口質時を得たるばかりにて、その試みを

責めざる故なり。責めず、心をこらざる者、誠の変化を知るといふ事なし。ただ人にあやかりてゆくのみなり。責める者は、その地に足をすゑがたく、一步自然に進む理なり。」（『三冊子』）

流行についての両書の叙述である。句の風体と、「不易流行」を取ることで、誤りを冒した去来は、今や誰の目にも明らかで、第二の誤りを仕出かすことになる。これを知らなければ新風が起こらないという、流行は、彼にあっては、単なるファッションであつたことが、ここに至つて明白になる。それは形容・衣裳・器物などすべてのもののその時々のはやりであり、去年のファッションは今年はもう流行遅れで着られないという、あの流行なのである。

不易は二度も三度も学ぶ必要はないと高言した去来も、流行となると目の色が変わつてくる。流行はその時々に取りいれなければ、芭蕉の言う流行ではないとさえ極言する。しかし「不易流行」説の流行は本来にファッションなのだろうか。時々刻々変化する、その時にもつともふさわしい一時のはやりののだろうか。

これに反して『三冊子』は、流行の代わ

りに、変化という言葉を使用する。「乾坤の変は風雅の種也。」のあの変と同じ意味であることは言うまでもない。もともと流行という語には、第一に流れゆくこと。ゆきわたること。という意味がある。第二の用法として、ファッション、つまりはやりすたりのはやりがある。ではなぜ『三冊子』は流行の代わりに変化を使用したのだろうか。

先に易の三義の中、変易と不易のこの二つが「不易流行」説の母胎ではなからうか、という仮説を紹介すると共に、両書の相違を考えてみたいと述べた。その時変易が宇宙の森羅万象の流転変化を指すものであると言ったが、この流転変化には、第一の流れゆくことという意味はあるが、第二のファッションの意味は全くない。

このように考えてくると、『三冊子』では明らかに流行という語の曖昧さを嫌って、流転変化の変化を用いたのではないかと推測される。つまり変化という言葉の採用は著者の意識的選択を示すものだ、ということができる。この事は同時に芭蕉、土芳師弟の思考の背後に、はつきりと『易経』が存在していたことを暗示している。

「千変万化する物は自然の理なり。変化にうつらざれば風あらたまらず。」ということが、『易経』における変易の意味する、森羅万象の流転変化現象という、自然の理を指しているのは言うまでもあるまい。この叙述には、変化の必然性と新風の出現という『易経』の思想と、その俳諧への適用とが明らかに見て取れるのではないか。

「たとへば歌仙は三十六歩なり。一步も後に帰る心なし。行くにしたがひ心の改まるはただ先へ行く心なればなり。」(『三冊子』)

芭蕉のこの言葉は、連句について言っているものだが、同時に変易における四季の移り変わりの規則正しさ、決して後退を許さないその前進の意志とも言うべき不易の存在を、下敷きにしての考察と見られぬこともない。

また見ようによつては、現実の旅を心に浮かべた芭蕉の、目的地を目指しての、一歩一歩が、さらにそれに伴う、眼前の事象の変化につれての心のときめきを感じられるようではないか。それは、現実の旅を、また『易経』の不易変易、連句の原理とし

ての「不易流行」のすべてを貫く道なのであるから。

風雅の誠について

変化は瞬時の停滞をも許さぬものである。そのためには、その時々流行に人真似をして飛びついただけでは駄目である。何よりもこの試行を徹底的に反復追求して、風雅の誠を求めようと、心を凝らして努力しなければならぬ。それでなければ、俳風の革新などということとはとても覚えなく、ついには空念仏に終るだろうと言っている。

さらに、この風雅の誠を求めるため努力するものは、決して現状維持に終わることではなく、常に前進を続けるだろう、と力強く言い添える。『三冊子』がこのことを強調して倦むことがないのは、「不易流行」の確立が、実にこの風雅の誠あつて初めて可能となるからに外ならない。引用を続けよう。

「夫、俳諧といふ事はじまりて、代々利口のみにはたはむれ、先達終に誠をしらず。中略」されば俳諧の名ありて、その物に

誠なきが如く、代々むなく押し移る事いかにぞや。」(『三冊子』)

芭蕉以前にはただ機知的な言語表現に終始していた俳諧が、誠を欠いたまま傳承してゆくことの空しさを述べるとともに、風雅の誠の必要性を強調している。この風雅の誠を求めることによって起こる、一歩一歩自然に前進する心の動きが、必然的に個々の作品の持つ形態の新しさを、生み出すことになる。それゆえ、常に努力して変化を求めなければ、新しさも生じない。新しさは言わば連句における花のような存在なのである。

『三冊子』は繰り返しこう述べながら、芭蕉が新しさを求めて、それこそ瘦せるような思いをした、と付言することを忘れない。ここには「責めて流行せざれば新しみなし。」(『三冊子』)という形で、変化が登場している。またその結果である新しみと、変化の別名である流行とが癒着した形で共存している。一歩踏み外せば、去来の「流行」になってしまうことは明らかである。

「是(変化)に押しうつらず」で始まる一文は、否定的表現を用いて、変化の種々

相を躍動的に述べているが、この叙述は『周易序卦伝』の易の六十四卦の配列序次の説明文を思わせる。それは万象の変化の背後にある不易の存在を顕著に感じさせるとともに、瞬時の停滞もない変化の様相を彷彿させる点で、連句との共通点があるように思われる。

「天地ありて然の後に万物生ず。天地の間に盈つる者はただ万物なり。故にこれを受くるに屯をもつてす。屯とは盈つるなり。屯とは物の始めて生ずるなり。物生ずれば必ず蒙なり。故にこれを受くるに蒙をもつてす。蒙とは蒙かなり。物の穢きなり。物穢ければ養わざるべからず。——中略——震とは動くなり。物もつて動くに終るべからず、これを止む。故にこれを受くるに艮をもつてす。艮とは止むるなり。物もつて止まるに終るべからず。故にこれを受くるに漸をもつてす。漸とは進むなり。——中略——物は窮むべからざるなり。故にこれを受くるに未済をもつてして終るなり。」という、『周易序卦伝』は、その変化の因を衝き、果を呼んで尽きることがない。艮の赤信号の次には、漸の青信号が灯り、常に希望を与えることを忘れてはいない。

い。

こうして風雅の誠を責める者には、決して足踏み状態はあり得ず、おのずから前進を続けることになるのだ、と言う。宋学と同様に『三冊子』では、風雅の誠が根本にあつて、ここから万代不易の法と、万象の变化現象が生ずることになる。

この不易と変化には同一性が認められ、不易自体も決して固定的なものではない。反対に、万象の絶えざる変化がその不易性を維持することに役立っていると言う。ではこの現象と、それを律する法との本と言われる、風雅の誠という概念は一体どこから生じたのであろうか。

芭蕉が手本としたと思われる、『易経』では、この「不易流行」に当たる、不易と変易を統一するものは易簡ということになる。易簡とは、前にも説明したが「乾は易をもつて知どり、坤は簡をもつて能くす。」というように、天地の働きを指している。連句に適用する際、この易簡に代わるものとして登場したのは、人事における天地の働き、つまり宋学の「誠」であることは明らかである。これこそ風雅の誠と言われるものの実体である。

かつて芭蕉が、占筮をしてもらった時、萃という卦が出たことは前に述べた。その時この卦の芳しからぬ要素に対して、言われた注意「貞正をとり守れば、たとえ事が成就しなくとも、そのため咎を受けることはない」を思い出してもらいたい。芭蕉は、この言葉を心の隅に留め、片時も忘れたなかったようである。

さらに『易経』を再び繙くことによつて、芭蕉は、この貞正が八卦の凶を薄めるという消極的な力としてではなく、易全般に通じるものであることを知ったと思われる。

「吉凶とは貞にして勝つ者なり。天地の道は貞にして観ずる者なり。日月の道は貞にして明らかなる者なり。天下の動はかの一に貞なる者なり。」(周易繫辭下伝)

貞にして勝つとは、誠あるものが勝つ、ということである。貞にして観ずるとは、天地の道が貞正をもつて、人に模範を示す、ということに外ならない。

易簡は天地の働きであるが、天地の道は貞を範とするという。易は、人がこれに接するのに、無心と、この貞正であるところの至誠とを要求する。この無心と至誠こ

そ、芭蕉が終生説いて倦まなかったものである。人のもつて範とすべき、天地、日月の道つまり貞正が風雅の誠になった、というのは果たしてこじつけと言えるだろうか。もしそれが俳諧における天地、日月の道でないとしたら、風雅の誠とは一体何であらうか。

ところが今まで見てきたところでは、『去来抄』は、この風雅の誠について、一言も触れていない。芭蕉俳諧の真髓とも言ふべき、この言葉がどこにも見出せないのは不思議という外ない。『三冊子』とほぼ同時期に成立したと推定される、去来の『旅寝論』にも、芭蕉没後ますます喧しく世上の論議を呼ぶようになった「不易流行」説についての記載はあっても、風雅の誠という言葉は見当たらないのである。

ではなぜ『去来抄』には「風雅の誠」がないのか。去来が流行をファッションの意味にとつたことは前に述べたが、その結果はどうなるだろう。不易流行は、彼の言うように、正風と変風の別名に過ぎなくなり、たとえこのことを会得したところで、急に俳句の力量が上がる訳ではない、ということになる。

そのうえファッションである流行は、一歩の遅れも許さないのである。このように流行に浮き身を簞す者にとつて、『三冊子』の説く、風雅の誠などという代物は、邪魔にこそなれ、何の役にも立たないことは瞭然であろう。このようにして、去来は、『易経』においては本来三元的であった概念を、二元化してしまったのである。

芭蕉の真意と両書

「乾坤の変は風雅の種なり」という芭蕉の言葉が『易経』の根本概念である、乾坤二卦の変化、つまり天地の生成を、踏まえたものであることはたびたび言及した。このような芭蕉の易へのなみなみならぬ傾倒を知れば、風雅の誠を意識的に無視した『去来抄』より『三冊子』の所説の方が、その真意に近いと考えて間違ひなからう。

先に『去来抄』と『三冊子』の「不易流行」説を含む記述の相違が、単にそれぞれの著者の年齢、性格に基くものである、という説に疑問を呈しておいた。もちろんそれも一つの考察ではあり得るし、また全面的に否定しなければならぬような根拠も

ない。だがそれより遙かに強力な「風雅の誠」の有無と、それを基とする流行の解釈の違いの方に、まず目を向けるべきではなからうか。

さらに両書の著者の執筆態度の差も、これに加えなければならないまい。己が博覧強記に絶対の信を置く、去来が引用文献類にほとんど目を通した形跡がないのに比べ、土芳は実に詳細な検証をしているように思われる。こうした点も、芭蕉の所説を紹介するうえで、差異の原因となったことと思わせる。

だが去来の怠慢と言われているものも、事によると刊本に当たってその当否を確認するという、労に耐えられないほどの体力の衰えによるものかもしれない。年齢そのものの差についてだけなら、両者の差は僅か六歳に過ぎないのである。

『去来抄』の成立は、去来五十二歳の時と推定されるのに対し、『三冊子』の成立は土芳四十六歳のころと言われている。もともと去来が同書成立の約二年後の宝永六年に五十四歳で没しているのに対し、土芳は、『三冊子』成立推定時から実に二十八年後、享保十五年七十四歳で他界してい

る。

去来は素堂の「吾子志あらば我もともに吟会して、一の新風を興行せんと也。」

（『去来抄』）という誘いに對し、「世波老の波日々に打重り、今は風雅に遊ぶべきいとまもなければ、只御残り多く思ひたるのみ」（同書）と言つて断つてゐる。もしこの記事が事実であるとしたら、『去来抄』の杜撰としか言ひようのない言説の紹介も、単に作者の老耄と自己顕示欲の強さという、年齢、性格だけに帰せられてよいかどうかは、簡単に決定できぬことである。

そればかりではなく、ここには「不易流行」説という芭蕉の言説の發展段階が、またその反映でもある混乱が、二重写しになっているかもしれない。換言すれば、それらは言わばこの新説の陣痛とでも言うべきものでもあろう。確かにそこには去来の誤解もあつたことであらう。だがうる覚えと非難される、彼の記述の随処に、『去来抄』によらなければ得ることのできない、貴重な記述が点在していることを忘れてはなるまい。

その一つとして「この説が古説か、先師

の發明か」という魯町の質問に対する、去来の答弁を思いだそう。また『三冊子』にも、数こそ少ないが、風体とまぎらわしい例示が見られたことを忘れてはなるまい。くだいようだが、これらは芭蕉がこの説を追求する過程において、実在したことなのである。

その萌芽が占筮の時期以後に遡るとしても芭蕉が『おくのほそ道』の旅に出た、元禄二年から、その没年の同七年までの間に、熟成していったと言われる「不易流行」説も、仔細に見れば、必ずしも完成したものかどうか疑問であらう。この説が、俳諧の本体（『去来抄』）とも言われ、つまりたびたび言うように連句の構成原理として唱導されたものであることを忘れてはならない。

そして連句の各部分に、この説を当て嵌めようとする場合の意外な困難さは、一つには適用のための方法がまだ確立されていなかったためと思われる。さらに芭蕉のこの説に対する説明も、門弟個々の力量に応じて異なるいわゆる対機説法であつたため、無用の混乱を招いたのかもしれない。

このことは「不易流行」を同じ位相上の対

立概念として、理解した門弟が多かったことからも伺われる。

「先師、はじめて俳諧の本体を見つけ、不易の句を立て、また風は時々に変ある事をしり、不易と流行との句を分かち教え給うなり。」(『去来抄』)

「不易、流行は……只正風と変風の名也。」(『旅寝論』)

そのうえ不易と流行(の句)を分けて、芭蕉が教えたということは、少なくとも去来の言うように事実であろう。ただ芭蕉がどのような意向でそうしたかは不明である。ただ『易経』に暗示を受けて、連句の構成原理として、「不易流行」説を見出した、芭蕉が、去来の言うように、それを単なる句の風体にしてしまうなどとは、どう考えても理解できぬことである。

なぜなら現象と法則の結婚というこの思考からは、何ものも生じないことを、芭蕉は誰よりもよく知っていたはずだから。

「かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の押しうつるごとく物あらたまる、皆かくのごとし。」(『三冊子』)との芭蕉の言葉は、停滞を嫌悪し、誠の変化を標榜した彼の革新指向を示している。それは、談林

俳諧の現状に対する挑戦にも等しく、風雅の誠の確立により俳諧の面目を一新しようとする、新しい時代風潮の先取りとも言えよう。

さらに土芳により「亡師芭蕉翁、この道に出でて三十余年、俳諧初て実を得たり、師の俳諧は、名は昔の名にして、昔の俳諧にあらず、誠の俳諧なり。」(『三冊子』)と喝破される体の、虚から実への一大転換でもあったのである。

体験と実践の道

だが「不易流行」説という、芭蕉自らの体験と実践によつて裏付けられたこの道は、最初に引いた荘子の言葉のように、ただ実践によつてのみ、つまり「これを行きて成」るものである。物なれば、これを名付けることもできよう。だが「道は名に当たらず」(『莊子』)と言われるように、もともと名付け得ぬものである。

そのうえ「道は聞くべからず、聞けばすなわち非なり。道は見るべからず、見ればすなわち非なり。道は言うべからず、言えばすなわち非なり。いずれか形をあらわす

ものの形あらざることを知らん。道は名に当たらずと。」(『莊子』)と言われている。

それゆえ去来の誤ちは、聞くべからざるものを聞き、見るべからざるものを見、言うべからざるものを言おうとしたためであることがわかる。これに反して土芳の取つた方法は「これを行きて成り」つまり誠による実践であつた点で、賢明と言うべきであらう。

芭蕉が偶然発見したこの道(「不易流行」説)は、事俳諧に関する限り、前人未踏である。しかもそれは、迷う恐れのない、坦々たる昔ながらの大道などではさらさらない。前人未踏の道は、自らの責任で、岐路があればその一つを選び、荆棘があれば自力で切り拓かねばならない。「風雅の誠」を責めることはこのように限りない辛苦を伴う、文字どおり「求道行」なのである。

俳諧において未踏の道である「不易流行」説も、占筮による衝撃だけでは、これほど完成した形のものにはなり得なかっただろう。もし芭蕉の往来した現実の道と、この道とを重ねあわせてなされた推敲がなかったとしたら、全く違ったものになつて

いただろう。仮空の道は、現実の道の裏打ちを欠けば、生命あるものになり得なかつたに違いない。

現実の道は、『おくのほそ道』の旅に同行した曾良の『旅日記』を見ればわかるように決して晴天の日ばかりではなく、強雨、雷雨をもまじえて、旅の半分あまりは雨天であった。また仮空の道とて安穩とは限らず、道を失えば死ぬことになるし、これを手にすれば生きることができる点で、現実の道と少しも変わりはないのである。

そのうえ歩行のリズムは思考のリズムだとも言われる。現実の道には、泥濘もあれば、崩壊箇所もあるが、これには古来の得道者がそうしたように、「弱するもまた楽しみ、通ずるもまた楽しむ。」（『莊子』）という柔軟で捉われない姿勢が必要となることは言うまでもあるまい。

さらに「此道の我に出て百変百化する。しかれどもその境、真草行の三ツをはなれず。その三ツが中いまだ一二をも不尽と也。」（『三冊子』）と述べた芭蕉は、また「私の俳諧はまだ俵の口を締めている縄を、解くまでに至っていない。」とたびたび口にもし、旦暮の嘆を漏らしていたよう

である。

しかも発句の技倆は門弟に譲つたとしても連句だけは私の真骨頂だから譲るわけにはいかないと、常に自負していた芭蕉である。それが己れの到達した「不易流行」説を、門弟の誰かが継承発展させてくれることを、心ひそかに望まぬはずはあるまい。

「俳諧は、教へてならざる処あり。能く通ずるにあり。」（『三冊子』）

芭蕉のこの求道行は、幸いにして土芳という、後継者を持つことができた。『三冊子』によれば、彼の実践は非常に徹底したものであり、常に師の心を理解することに努力して、絶えず「その足下に戻る」ことを要求する。それには、自らの心情のヴォルテージを高めることで、師の心をどこまでも探求すれば自然と師の心の匂いが自分の心にも転化してくる、というのである。

この真摯な態度は、ある意味で修道僧や武芸の修業者を思わせるものがある。これこそ学まなびと言うものであろう。この探求が不徹底な場合には、絶えず私意が入りこむ余地があるので、瞬時も怠らず、ただただ師の心を求めよ、と同書は戒めている。ここには宋学の影響が顕著である。そしてこ

れこそ俳諧にとつて一番肝要なことであり、「地ごしらへ」と呼ばれるのも当然であると述べている。

土芳はこの「地ごしらへ」を他の門弟たちに求めたばかりでなく、自らも率先躬行したように思われる。この限らない探求心と、峻厳とも言うべき自己点検の実践こそ『三冊子』の記述を貫いているものであることは言うまでもない。求道行の後継者という点、師の踏みならした大道を、何の障害もなく、心を勞することもなく進んで行くことと思われるかもしれない。

ところが事実は全く正反對なのである。師の苦勞をわが物とし、師の選択を自らに課したうえで、道を求めようとするのである。いわゆる「古道坦然たる」を行くことと、雲泥の差があることがこれでわかるであらう。それゆえくどいほど私意を除け、師の心を求めよと言いつ続ける。しかもこれで終わりなのではなく、この程度は俳諧の素地を固める基礎工事に過ぎないという。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る（笈日記）
病中吟のこの句からは、旅の詩人芭蕉の、病いによる現実の旅の中断と、仮空の旅の空転とが痛々しいほど感じられる。

「不易流行」説を本当に理解するには、現実の旅が絶対必要だなどとは言うまい。だがこの説が、現実の道を踏み進む者にして初めて得ることができるとあることは、忘れてはならないだろう。

なぜならそれは頭の中で拵えあげられた、空想の産物ではなく、一人の行動者の感覚と思考を通して、体現されたものであるから。例えば、日月星辰の運行、春夏秋冬の移行というものは、その運行移行する物自体から眺めれば、常に変化しつづけて休まないものであろう。だがその背後には、一定不変の、つまり千歳にわたって同一の法則が存在しているのである。

流水は同じように見えても、行く水が戻ってくることはなく、今年の花は去年の花とは別のものである。人とても所詮は同じであることは言うまでもない。芭蕉は一行動者として、この流転の相の背後に存在する、不変の法則を凝視しつづけたのである。この凝視を妨げるものに対し、行手を阻む荆棘に対し、彼は素手で道を切り拓いていったし、そうすることによってのみ求道行を成就し得た。

「不易流行」による言説の検討

こうした辛苦の果てに獲得した「不易流行」説が蕉風連句の骨格とも言うべき、存在であることは言うまでもない。だが風雅の誠を基にしたこの説も、これだけではその血肉を欠くように思われるがどうであろうか。さらに『三冊子』『去来抄』などの処々に散見する、芭蕉の片言隻句を拉致してきたって、この説に当て嵌め再考慮するならば、その全容がなおはつきりするようになってしまう。

こうした検討は今後の課題とも言うべきで、われわれにとり今まで単独の言説、独立の言説と見做されていたものが、この「不易流行」の光のもとでは、新たな様相をもって蘇るのが見られるであろう。これは決して一見自立しているかに見える言説の存在価値を貶めるものでなく、今までに倍する未知の光彩のもとに見直すことを意味している。

このように検討することだけが、歳月による変化だけでなく、無限とも言うべき曲折を経て、われわれに手渡された、芭蕉の

言説の眞の姿を認識することになるであろう。一例を挙げよう。

「静かなる物是不変の姿なり。動ける物に変なり。時として留めざれば止まらず。止まるといふは、見とめ聞きとむるなり。飛花落葉の散りみだるるも、その中にして見とめ聞きとめざれば、をさまると、その活きたる物だに消えて跡なし。」（『三冊子』）

静かなる物である道法は、ここでは不変の姿をとり、不易を指している。動ける物、現象としての変易は、何よりも物であるから、これを名付けることができる。法であれば見ることも、聞くことも、言うことさえも不可能であるが、物はこれを命名することで存在するのである。命名を怠れば、物は存在しないも同然となる。これが「時として留め」ということの真意である。

もしそうしなければ、その動きが収まった後には、変化そのものも消えうせ、その痕跡さえもなくなってしまう。これは変易という現象を視聽覚的瞬間的に捉えて、連句のもつ可動領域での瞬間活写の要諦を如実に示すものである。碎いて言うなら、シ

ヤッター・チャンスの重要さの指摘とも
れよう。同じことのより簡潔な表現を挙げ
よう。

「物の見えたる光、いまだ心に消えざる
中にいひとむべし」(『三冊子』)

いま一つの例を挙げておこう。

「句作りに、成ると、するとあり、内を
つねに勤めて、物に応ずれば、その心の色
句と成る。内をつねに勉めざるものは、成
らざる故に、私意にかけてするなり。」
(『三冊子』)

優劣は明らかである。成るを上とし、す
るを下とする。実作者であれば、誰もが持
つ体験であろう。「内をつねに勤めて」と
は、日頃の目に見えない努力を指すもので
あるが、その背後に、風雅の誠を責める必
要を暗に示しているものと思われる。この
努力の効果で物に触発されて、自然に玲瓏
たる一句をなすことができる。しかもそこ
には努力の痕跡さえ残さない、まさに恵ま
れた瞬間である。

日頃こうした努力を蔑ろにする者は、変
化に移ることなく、従って新風などは望む
べくもない。「心のいろいろはしからざれ
ば外に詞をたくむ」(『三冊子』) ことにな

り、師の心から遠く離れて、私意だけでや
ってゆかねばならなくなる。こうした「そ
の心の色句となる」場合よりも、「私意に
かけてする」方が圧倒的に多い、われわれ
にとり、頂門の一針とも言うべき教えであ
ろう。

ここで先に触れた萃^すの卦に話を戻してこ
の小論を終わることにする。萃^すは地下水が
地上に滲出して涸れ沼を満たし、万物を潤
す卦象と言われている。この象は、芭蕉が
「易経」の不易変易からヒントを得て、こ
れまで連句の世界には存在しなかった「不
易流行」説を唱導したことを指すものでは
なからうか。また和悦順服する民心の象と
は、この説を初めて聞き、喜び従う人々の
癒やされた心の飢渴ともとれよう。

宗廟に祭祀を執行するによいとは、『易
経』という、古人の知恵を収蔵した殿堂に
も匹敵する、俳諧の神殿に祭司として立
つ、芭蕉の姿でなくて何であらう。そのう
え無心にして一点の邪念なく、ただただ誠
を致すという自ら神に通じる道を只管歩み
つづけた彼は、この風雅の誠を、不易流行
の元に据えることを、一瞬たりと怠ること
がなかったのである。その結果はどうであ

ったか。

確かに即座に成功するようには見えな
かったであろうが、何らの咎も受けることな
く、一切の毀誉褒貶の埒外にあつて、結局
芭蕉はその志を遂げたのである。そうだと
すれば、この萃^すの卦象は、芭蕉師弟の杞憂
に反して、世の人々の信望を集め、「不易
流行」説導入という大事を成し遂げ、涸れ
沼のようであつた連句の世界を潤す吉祥で
はないだろうか。

参考文献

- | | |
|-------------------------------------|----------------------|
| おくのほそ道／萩原恭男 | (岩波文庫) |
| 芭蕉文集／頼原退蔵 | (〃) |
| 去來抄・三冊子・旅寝論 | (〃) |
| 芭蕉俳句集／頼原退蔵 | (〃) |
| 花屋日記／小宮豊隆 | (〃) |
| 易経(上・下)／ <small>後田真治</small> | (〃) |
| 老子／武内義雄 | (〃) |
| 莊子(一・四)／金谷治 | (〃) |
| 芭蕉の世界／尾形仿(講談社学術文庫) | (岩波書店) |
| 求道と悦楽／入矢義高 | (〃) |
| 自己と超越／入矢義高 | (〃) |
| 連歌論集・能楽論集・俳論集／ <small>伊地知鉄男</small> | (小学館) |
| | <small>栗山 理一</small> |